

## ボヴリル・ポスターを巡る二三の話題

1996年8月25日の夜テレビがミュージカル映画を流していた。「一晩中でも踊れたのに I could have dance all night」は勿論の事、例の「The rain in Spain stays mainly in the plain」の発音を教え込み、それを鸚鵡返しに反復練習を重ねるシーンがあった。田舎の花売り娘を演じるオードリー・ヘップバーンを貴族階級にデヴェーさせようとする下心をもった言語学者ヒギンス教授役のレックス・ハリソンの掛け合いの情景である。このミュージカル「マイ・フェア・レイディ My Fair Lady」はワーナー・ブラザーズ提供、ジョージ・キューカー監督、音楽はアンドレ・プレヴィンと相当にレヴェルの高い作品である。元々これは世界の皮肉屋と綽名されたジョージ・バーナード・ショー(1856-1950)の戯曲「ピグマリオン(1913年初演)」を下敷にしているが、作者が存命中の映画化を拒んだために、1964年の製作となったものである。茲処で話の筋を辿るのは退屈であろうから止める。しかし映画のはじめ辺りに出てくる合唱曲「ほんの少し運がよけりゃ With a little bit of luck」に触れなくては本稿が進まない。この男性合唱曲が演じられる場面の背景をよく見ると「ボヴリル」のポスターが貼ってあるのに気付く。我々の手許にあるポスターのどれとも



H.H. ハリス「ボヴリルで気分爽快!」(AN.3862)

一致しない文字だけのボヴリルである。扱て、前置きが長くなったが、今回は我々の資料館が所蔵しているボヴリル・ポスターの紹介である。

○

ボヴリル・ドリンクは1886年スコットランド人のジョン・ローソン・ジョンソンによって開発された。元々はこの世紀初頭ロシア前線にいたナポレオン軍に供給するために編み出されたものであった。いろいろ商品に改良が加えられ、1888年までに英国の3000以上のパブ、食料品、薬局

がボヴリルを売り始めていた。それはお湯で薄めてドリンクにされている。またスープやシチュー、ポリッジの調味料、或いはパン、特にトーストに塗るものとして今日でも使われている。ビーフ・ティーは20世紀初頭にフットボールファンに人気のドリンクとなっていた。ボヴリルと言う名称の抑もの由来は、その開発者ジョンソンが偶然見つけたものであるが、余り聞き慣れない言葉ではある。「Vril」は治療力のバランスを落ち着かせる“電流”若しくは“気”を意味すると言うのであり[2002年発行の研究社版新英和辞典にはvrilの見出し語はない]、それにラテン語で「雄

牛」や「雌牛」を意味する‘Bos’(属格のbovis)を最初の2文字にくっつけたと伝えられている。“-vril”は1870年頃に人気を博したブルワー・リットンの「失われた種族」の小説「The Coming Race」(Vril:The Power of the Coming Raceとして再発行)に由来する。その中である地底のロボットが精神制御できなくなり、そこから「Vril」と名づけられた破壊的な力をもつ液状のエネルギーが流れ出すと言う話に目をつけて、ボヴリルの強壯的特質をジョンソンは強調したのである。ジョンソンのボヴリル、即ち液体ビーフは言うに及ばず牛肉から作られているのであるから、「ラテン

語のBosが使われなければならなかった」と発明者はインタヴューに応え、しかも「Bo-Vrilとすることに何の躊躇もなかった」と断言している。(Richrd Bennett, The Story of bovril... 1953. 以下RB-BOVRIS-53と略記)

1870-71年、普仏戦争の折、ナポレオン3世は、空腹のままでは軍隊が進軍することが出来ない事を知り、それで彼は飢えた兵隊用に、100万本のビーフ缶を用意しよう命じ、これらの調達をジョン・ローソン・ジョンソンというスコットランド人に全て任せた。不幸なことに英国にはナ

ポレオン3世が要求するだけの十分な牛肉がなかったのである。そこでジョンソンは「ジョンソンの液体ビーフ」として知られる製品を作り、それがのちにボヴリル・ドリンクと呼ばれるようになったのである。ボヴリル・カンパニーが設立されたのは1889年である。早くにボヴリルは第一次世界大戦の戦中食として機能し続け、ヘレン・ツァラスミス Helen Zenna Smithによる「それほど静かではない…戦争の継娘たち Not So Quiet… Stepdaughters of War」という1930年の報告の中でもボヴリルはよく言及されていた。お湯に牛肉風味をつけた飲み物として、ボヴリルは厳しい奉仕活動の間ずっと、十分な食事ができていない働き詰めの救急車の女性運転手達の支えとしても一役買っていた。戦時の緊急事態においては同じであり、更に第二次世界大戦中の方がより一層ボヴリルの活躍する舞台が広がっていた。1966年にはボヴリルのインスタントのビーフ食品が見られるようになり、続いて1971年には「King Beef」という名のシチューやキャセロール、グレイビーなどのインスタント調味料として売られるようになった。これらの事を踏まえると「ボヴリル」のイメージは家庭でも街角に於いても極く日常的な情景、それも親和的な景色の構成要素になっていたのが十分に理解されるし、だからこそ「マイ・フェア・レイディ」の一局面に齟齬なく現れて来るというものである。

ジョン・ローソン・ジョンソンが死んだ後、ジョージ・ローソン・ジョンソンがボヴリルのビジネスを引き継いだ。1929年にジョージ・ローソン・ジョンソンはイギリス政府及び、イギリス王国に認められて貴族に列せられ、ルーク Luke 男爵となったと伝えられている(以下・・・RB-BOVRIS-53より抜粋抄訳)。

「マイ・フェア・レイディ」をこの稿の枕としたが、拙文を

閉じる段になって、関心は既に映画とポスターの関係の方に向いてしまっている。そして我が館が所蔵する第一次大戦期の合衆国の戦時ポスターに似たものに思いを馳せてしまっている。即ち、スタインベック原作、エリア・カザン監督、ジェームス・ディーン主演、あの「エデンの東」である。その話は別の稿に譲る事としたい。

○

以下我々の資料館が現在所蔵しているボヴリル・ポスターを一覧する。これらは1921年に大阪や東京で開催された「戦争ポスター」展(朝日新聞社主催)に出品されたと考えられる大型広告画である。



L.ホックネル「ボヴリルでなきやいや…。ママもそういってるよ。」(AN.4040)

1. OLIVER, A. & A.E. KENNEDY: Bovril. A little Bovril keeps the Doctor away. c1921. 1,485 X 1,947 mm. Lith. Coul.  
●A.オリヴァA.Eケネディ「ボヴリル一匙のボヴリルでお医者さんはいりません。」  
●AN.3861 (Acq. 1985.11.25)
2. HARRIS, H.H.: Bovril. prevents that sinking feeling. 1921. 2,008 X 1,510 mm. Lith. Coul.  
●H.H. ハリス「ボヴリルで気分爽快!」  
●AN.3862 (Acq. 1985.11.25)
3. Anon.: Bovril. Bovril will make a man of him. c1921. 951 X 1,496 mm. Lith. Coul.

- 作者不詳「ボヴリルあげて、すくすく育てましょう。」  
●AN.3863 (Acq. 1985.11.25)
- 4. SCOTT, Septemer E.: Bovril. "I think I like you bette as Bovril." c1921. 1,977 X 1,518 mm. Lith. Coul.  
●S.E. スコット「ボヴリルくらいに、牛さんが好きよ。」  
●AN.3864 (Acq. 1985.11.25)
- 5. OLIVER, A. & A.E. KENNEDY: Bovril. A little Bovril keeps the Doctor away. c1921. 1,487 X 1,946 mm. Lith. Coul.  
●A.オリヴァA.Eケネディ「ボヴリル一匙のボヴリルでお医者さんはいりません。」  
●AN.3865 (Acq. 1985.11.25)
- 6. PORVIS, Tom: Give him Bovril. A strong Bovril soon puts a man on his feet. c1921. 980 X 1,492 mm. Lith. Coul.  
●T.ポルヴィス「彼にボヴリルを与えよ。」  
●AN.4038 (Acq. 1985.11.25)
- 7. HARRIS, H.H.: Bovril. prevents that sinking feeling. 1921. 2,008 X 1,510 mm. Lith. Coul.  
●H.H. ハリス「ボヴリルで気分爽快!」  
●AN.4039 (Acq. 1985.11.25)
- 8. HOCKNELL, L.: It must be Bovril, Mummy says so. c1920. 994 X 1,506 m/m lith. Coul.  
●L.ホックネル「ボヴリルでなきやいや…。ママもそういってるよ。」  
●AN. 4040 (Acq. 1985.11.27.)

(美術工藝資料館 教授 竹内次男/事務補佐員 和田積希 2007.11.02)